

鳥取と鳥根の天理教

今回から2回にわたって中国地方の伝道を書く。中国地方は5県あるが、東と西、瀬戸内側と日本海側で風土が違う。

伝道経路を述べる時、鳥取県と鳥根県は切り離せない。一方岡山、広島、山口の3県は一緒に述べなければならない理由はないが、3県の教会数がなぜか370カ所余りとほぼ同じである。たぶん偶然であろう。伝道経路でも関連性はない。ほぼ同じ教会数でありながら3県の天理教伝道が別個であることを述べたい。まず今回は鳥取県と鳥根県の伝道を考える。

鳥取には138カ所、鳥根は145カ所の教会がある(『みちのとも』立教175年12月号)。県別教会数は多くない。しかし、両県は人口が少なく鳥取が約59万人、鳥根は約71万人(2011年10月総務省統計局)である。普通は教会数も人口と比例する。しかし鳥取、鳥根両県の10万人あたりの教会数は、鳥取23.6カ所、鳥根20.4カ所となり日本全体の平均より2倍近く多い。注目すべき数値である。

鳥取と鳥根東部の伝道経路は連続した同じ流れであり一つの話として書く必要がある。具体的に記述しよう。

兵庫県と京都府の北部(日本海側)の信仰が海に沿って、西へと伝わり鳥取に入り、さらに西へと伝播され鳥根県にも入った。教会系統で言えば、豊岡大教会と山陰大教会の伝道線が鳥取全県に広まり、また鳥根県東部にまで伸びたのである。

その結果、両大教会に所属する教会がたくさん設立されることとなった。鳥取県には、豊岡-53カ所、山陰-12カ所、合わせて65カ所(県全体の47%強)、鳥根県には豊岡-33カ所、山陰-34カ所、合わせて67カ所(県全体の46%強)がある。

豊岡大教会は兵庫県北西部の湯村に始まった。紺屋を営む木岡義八郎は明治16、17年と2年続いた早天のため徳島に藍玉を注文した。この時商人として来たのが正木國蔵で、彼はすでに天理教信仰者であった。身上をかかえていた木岡は正木により助けられ、熱心なおたすけ人になる。木岡を中心として豊岡大教会(当時支教会)ができ、鳥取県内に布教する人ができた。

豊岡系の伝道により鳥取市周辺に信仰が広まり明治28年鳥取分教会(当時支教会)ができ、現在35カ所ある教会の内鳥取県内に25カ所ある。同じ頃大阪の中河系布教師、林九右衛門という人が鳥取市周辺で不思議な霊教を見せ、豊岡系の人も助けられ林を師と仰いだ。当時はあまり教会系統を気にしなかったという。現在は豊岡の鳥取分教会、中河の稲葉分教会と別系統になっている。

豊岡の伝道は鳥根県にも伸び、松江分教会となった。木岡義八郎の薫陶を受けた稲葉善蔵は、明治24年12月松江を布教地と定め、翌年から本格的におたすけを始めた。封建的気風の強い土地柄で新しい宗教である天理教は中々受け入れてもらえなかったが、稲葉の真剣なおたすけと人格に心酔した人たちが次第に増え、明治28年、松江分教会(当時出張所)が設立された。

稲葉の弟子たちは松江近辺を布教し、またたく間に部内教会を設置した。松江と同じ明治28年に6カ所、翌29年にも1カ所設立し、松江分教会を含め明治20年代末までに8カ所もの教会が誕生した。

京都舞鶴にある山陰大教会は明治21年頃、京都府愛宕郡白

川村の布教師、沢田重左衛門の福井県若狭伝道に始まる。沢田はさらに京都府舞鶴で布教し明治24年に山陰大教会(当時支教会)を設立した。その後、山陰の熱心な布教師は西へ向かい、森本久平が鳥取県へ、増茂伊之蔵が鳥根県へ布教に出た。

明治24年頃、森本は鳥取市西方にある自分の出身地(気高郡)を布教地と定めおたすけ活動を始めた。入信した土地の人たちも森本と共におたすけに励んだ結果、日置谷という村ではほとんどの人が入信したという。明治27年日置分教会(当時支教会)が設置された。教会は「日置御殿」と呼ばれるほど隆盛であったが、内務省訓令の影響と負債の整理ができないまま次第に勢いを失い、その後名称を日置から東陰と変更し復興に力が注がれた。現在では鳥取に12カ所、鳥根に6カ所、全部で21カ所の教会を有するまで復活した。

一方、増茂伊之蔵は明治26年頃、鳥根県を目指して布教に出た。最初松江で活動したが、同じ松江で布教していた豊岡系の布教師の助言を得て出雲地方に布教し、明治28年、日登分教会(当時出張所)を設立した。増茂のおたすけや薫陶を受けた人たちが出雲近辺を布教した結果、明治28、29年に現在の雲陽、陽氣、登赤の各分教会ができ、さらに増茂から始まった伝道線上に設立された教会が20カ所ほどになる。しかし「日置」と同じく内務省訓令の影響を受け、他宗からの攻撃も厳しく次第に信者の離散が相次いだ。こうした一連の問題を解決するため、山陰大教会とも相談の上、陽氣分教会へ転属して再出発することとなり、登赤を山陰大教会に所属させるなど系統を再編した。

山陰大教会の鳥取、鳥根への伝道は二人の布教師から始まり、多くの教会となって結実した。しかし、その後の歩みは順調ではなく内務省訓令の影響を直接に受けた。その理由は簡単に言えないが、山陰地方は昔ながらの因習が強く、進取の気性に欠け封建的気風の強いところだと言われる。天理教は他国から来た新しい宗教だと見られ、警戒されたのではないか。

ここまで豊岡、山陰の両大教会により鳥取、鳥根の伝道を見てきたが、高知大教会系統の伝道も書く必要がある。高知の布教師、鳥村熊太郎はかねて鳥根県石見の知人を頼って布教したいと願っており、明治25年に里見半次郎と二人で鳥根へ向かった。濱田町に落ち着き旅館に泊まりながら布教したが話を聞いてくれる人がない。旅館のおかみに事情を話すと病人を紹介してくれ、その人を助けたことで道がついた。明治27年に石濱分教会(当時支教会、現濱田分教会)が設立されたが、これが鳥根県で最も早い教会であった。濱田分教会は現在33カ所の部内教会を有し、内20カ所が鳥根県にある。

最後に、豊岡と山陰の伝道は、なぜ東ではなく西へ伸びたのだろうか。まず伝道地選定はおちぼの逆方向へという傾向があり、豊岡はそれにあたる。しかし山陰の場合、南でなければ西でも東でもおちぼと逆方向になる。山陰の基礎を築いた沢田重左衛門は最初福井県若狭で布教した。その後京都府へ入り舞鶴に教会を設置した。この時すでに西方へ向かっており、そのまま西へ、鳥取と鳥根へ伝道線が伸びたのではないかと想像する。

なお笠岡、河原町、生野の伝道も書くべきであるが今回は触れることができなかった。